

## 警察との打ち合わせ結果

当方から「表現の不自由展 その後」の概要を説明。(芸文センター8階の図面を提示。)  
相手方からは、入場制限の有無や展示場所について確認。

### (主な内容)

- ・ 2015年に東京で無事に展示できたからといって、今回も対応できると判断することは危険である。会場の規模や会期が違いすぎる。また、芸文センター周辺の道路占有許可や交通規制は芸文センターの立地や会期を考えると現実的ではない。
- ・ 作品内容を見る限り、天皇への不敬や慰安婦問題など、保守系団体を刺激する作品数の割合が高くバランスを欠いているように感じる。趣旨を説明したとしても、偏りがあるとなかなか理解されないような気がする。新天皇即位というタイミングや最近の日韓関係から保守系団体は、過敏に反応する可能性が高い。
- ・ 展示の趣旨を説明しようとしても、聞き入れず、反応してしまう団体もある。
- ・ 写真撮影可であるとすると、SNSによる拡散を覚悟したほうがよい。  
SNSの影響は、会期も長く、どの程度波及するかは、未知数。
- ・ 警察の立場からは、展示場所を踏まえた、あらゆるリスクを想定した体制を構築してもらう必要がある。街宣車、作品破壊、危険物持込、爆破予告等。
- ・ 作品を触ることができるのであれば、当然、器物破損が想定され、警備員を常駐させるのは、必須ではないかと感じる。有事を想定した対応をとるのは大前提。
- ・ 警察から、主催者へ申入れをする可能性もある。  
申入の例 金属探知機の設置、セーフティーゾーンの設置
- ・ 展示内容が判明して想定されるのは、「電話が事務局へ殺到 → 申入 → 街宣車 …」という感じ。
- ・ 直接の申入や街宣車が来るのが当然想定されるのは、芸文センター、県庁。  
円頓寺への影響はないとは、言い切れない。抗議する団体等が、「あいちトリエンナーレ」での展示ということに着目し、他の作品を確認するため、他会場を訪れることは十分想定され、その上でどのような行動に出るかということになる。
- ・ 警察独自の情報や、精度の高い情報により危険が想定される場合は、私服警察官による巡回をすることもある。
- ・ いずれにしても、本件については、連携をとって対応していきたいので、情報提供は早めをお願いしたい。